

社会福祉法人 唐橋福社会

編集兼発行人 理事長 下村 勉

繰り返すな 戦争の惨劇

「孫たちへの証言」第33集が刊行

「8. 6ヒロシマ」、「8. 9ナガサキ」、そして「8. 15敗戦」の記念日は、改めて戦争の惨状を思い起こし、平和の大切さを痛感する機会である。新聞もテレビも「75年」の特集を多彩に繰り広げている。先日、「孫たちへの証言」第33集という戦争体験の証言集が大阪の新風書房という出版社から刊行された。年々少なくなっていく戦争体験者が書いた239編の証言のうち76編が選ばれてこの書になった。実は、その中に私のささやかな戦争体験を記した1編が収録されている。鮮やかに蘇ってくる私の3歳から6歳ごろの記憶である。今、目の前にいる園児たちと同じ年頃である。その頃の私の記憶に基づく証言である。ここに、一部加筆して再掲したい。

(「孫たちへの証言」No.33 ご希望の方に進呈します。先着10名まで)

鮮やかに蘇る幼い日の戦争の記憶

(私の戦争体験) 2020. 8 加筆修正 下村 勉

父に三度目の「赤紙」が来た日

1944(昭和19)年3月、私が3歳9か月の時、39歳の父・喜代三に3度目の召集令状が来た。すでに2回、「応召」していたので、この歳になってまたまた召集されるとは思ってもいなかったようだ。「まさかの赤紙」だった。アジア・太平洋の各地の戦線で、百万を超える若い兵士たちが次々と命を散らしていくなかで、このような年配者までも召集しなければならない程、兵士が不足し、戦局は困難に陥っていたのだ。

すでに敗色濃厚の中、父は泥沼の中国南部戦線(当時の言い方をすれば南支那)へ出征することになった。旅立つ日、父は姉や兄たち3人を一室に集めて話をしていて、幼い私と妹はその場に入れてもらえなかったが、父がどのような話しをしているのか、3歳の私にもおおよその察しがついた。父は、たぶん、「鬼畜米英を倒すために出征する。母を助け、幼い弟・妹と家を守れ」と訓示していたのだろう。女学校一年で12歳の長女を先頭に、5人の子育て真最中の父の旅立ちだった。長男は10歳で国民学校4年、次女は8歳で同2年、そして4番目の私と、下に1歳の妹がいた。この家族を残し、「死」を覚悟しながら戦場へ赴く父の思いは悲痛そのものだったに違いない。

一方、留守を預かる母・政江の苦勞がいかに多かったか、今思い出しても目頭が潤む。1町歩(1ヘクタール)の田畑を耕し、病弱な祖父母、5人の子どものほか、京都から疎開してきた叔父の留守家族を合わせて実に12名の大家族であった。農家とはいえこの家族を食べさせるのは大変だった。わずかなコメに味噌汁、イモ、大根の葉っぱ、芋のツルなど食べられるものなら何でも混ぜ込んだ「おじや」

が常食だった。白いご飯など、盆にも正月にもなかった。イナゴ、バッタなどは、貴重なタンパク源だったから、子どもたちは田んぼのあぜ道を走り回って捕まえた。「飽食の時代」の今では、とても考えられない食糧事情の中で私は育った。

幼児にも、かなり重労働の家事分担

現在の長浜市に位置するムラの上空を米軍の爆撃機の編隊がしばしば通過するようになった。幸い爆弾が落ちることはなかったが、空襲警報のたびに裏の畑の防空壕へ逃げ込み、警報解除を待った。幼い私にも家事の分担があり、防空壕の中に溜る地下水を汲み出す仕事を与えられた。毎日、十数回もバケツで運び出す仕事は、幼児にはかなりの重労働だったが、家族みんなができることをやらなければ生きていけなかった。苦難の日々を経て、終戦の日を迎えた。5歳になったばかりの私には「終戦」の意味がわからなかった。母たちは終戦を喜んだが、父は何ヶ月たっても帰還しなかったし、何の音沙汰もなかった。「どこかで戦死したのでは」という憶測も広がっていた。

ある夜、こんなことがあった。一人の見知らぬ訪問者があった。「父の戦友」を名乗るその人は、「下村さんには戦地で大変な世話になったが、名誉の戦死を遂げられた」として、その場所、状況などを詳しく語った。「私はどうにか生き延びることができ、過日復員したばかり。御恩があるので、取り急ぎお知らせにあがった」と述べた。「不幸なお知らせ」ではあったが、わざわざ遠方から来てくれた来客のため、可能な限りのもてなしをした。当時は大変な食糧難の時代。農家でも食糧は十分ではなかったが、それはそれ、特別な来客を粗末にはできなかった。

ところが夜間に至って、知らせを聞いた親戚たちが次々と集まる中、その客はいつの間にか姿を消していた。「おかしい」と騒ぎになった。そして、「戦死のお知らせ」は狂言であることが分かった。「農家なら食べるものもある」と、「一宿一飯」を狙った詐欺だった。後で判ったことだが、ムラの入り口の家で、まだ復員していない人の名前と出征先などを聞き出し、それにもっともらしい脚色と巧妙な演技を加えて騙す手口は、各地を渡り歩く常習犯に違いなかった。

家族は、ひたすら父の帰りを待ち続けた。昭和21年の5月。田んぼに蓮華が咲き乱れた。余りにも美しいので、「父が帰ってくるまで残しておこう」と、田植えをギリギリまで延ばした。しかし、父は帰らず、蓮華畑はつぶされて田植えがされた。そしてその年の収穫が終わっても、音沙汰はなかった。

父が、突然の「生還」！ 覚悟の出征から3年

私が小学校に入る前年、6歳になっていた昭和21年の夏。終戦からちょうど1年が経過していた。みなが半ば諦めかけていたとき、突然、父が復員してきた。当時の国鉄・北陸本線高月駅に降り立った父は、駅近くに住む妹（私にとっては叔母）の家に立ち寄った。無事帰還の姿を見た叔母は、田んぼ道を目散に駆け抜けて知らせに来てくれた。一般家庭に電話などなかった時代、息せき切って駆けつけた叔母は、「おとっちゃんが戻ってきたぜ」と我が家の玄関で叫んでいた。

私は近くまで迎えに出た。父は田畑で働くムラの人たちから、「これは喜代三さんではないかね。長いこと、ご苦労さんでしたな」とねぎらいの言葉を受けていた。覚悟の出征から3年。このムラからも幾人もの人が異国の地で無念の死を遂げていたが、父は生きて帰ってきた。文字通りの「生還」だった。一步一步と家族の待つ生家へと進む、そのときの父の思いを想起すると、今でも涙があふれる。

私の姿を認めた父は、私の名前を呼んだ。3歳のときに別れて6歳になっていた私が一目でわかったようだ。「いこうなったな（大きくなったな）」。その父の言葉と顔が今も脳裏に残る。

「三つ子の魂、百までも」というが、幼い日の記憶が今も鮮やかに蘇る。

父が帰還しても我が家の暮らし向きはよくならなかった。当時、農家が収穫したコメは、自家消費分を「飯米」として残し、他は「供出米」として強制的に出荷させられた。生死不明だった父の飯米はなかった。父が帰ってきたため、一層厳しい食料不足に陥った。おかわりを求める私に父のげんこつが飛んできた。終戦直後の「ドサクサの時代」が終わっても、なお2、3年、我が家に「終戦」はなかった。